

学位論文要旨

特別養護老人ホームにおける従来型施設とユニット型施設の
ケアに関する実践課題
—施設構造・ケア過程が入居者の生活に及ぼす影響—

関西福祉科学大学 大学院 社会福祉学研究科
臨床福祉学専攻 博士後期課程

壬生 尚美

【抄録】

本研究の目的は、特別養護老人ホームの従来型施設及びユニット型施設のケアの実践が、入居者の生活にどのように影響するかを検証し、今後のケアの実践課題を明らかにすることである。

研究方法は、①特別養護老人ホームの法規定や先行研究から、従来型施設とユニット型施設のケアにおける実践課題を介護職員と入居者の視点から概観した。②介護職員の視点では、両タイプのケアの特徴を介護職員のケア行動調査から明らかにし、介護職員の仕事への肯定的意識調査から検証した。③入居者の視点では、両タイプの施設構造とケア過程からの影響を、入居者の日常生活行動と生活意識調査から検証した。

その結果、従来型施設ケアの特徴は、多人数の入居者を少数の介護職員でケアする役割分担遂行型ケアが実践されていた。このことから、介護職員の仕事の満足感・やりがい感を低める結果となった。一方、ユニット型施設ケアは、小規模における連続的統合型ケアが実践されていた。そのため、介護職員の満足感、やりがい感が有意に高い結果だった。

入居者の生活行動では、従来型施設は、居室滞在率が低かった。活動などを通して他者交流をする機会があり、生活範囲を広げていた。一方、ユニット型施設は、個人の生活空間が保証され、入居者と介護職員との関係性は濃密であるものの、生活範囲は狭く限られたものであった。

以上のことから、入居者の尊厳や入居者の主体的な活動を支援するためには、従来型施設とユニット型施設のケアの良さを取り入れた新たな実践が求められる。今後は、入居者の施設生活の先にある地域に目を向け、入居者の主体的な参加と協働のもと、地域住民や多職種協働による支援を検討していく必要がある。

【論文構成】

序章

第1節 ユニット型施設ケアを巡る今日的動向

第2節 特別養護老人ホームにおけるケアの実践構造

第3節 研究の目的と仮説

第4節 研究方法と考察の視点

第Ⅰ章 従来型施設とユニット型施設におけるケアの実践課題(先行研究)

第1節 従来型施設とユニット型施設の施設構造の相違

第2節 従来型施設とユニット型施設におけるケアの実践に関する先行研究

第3節 従来型施設とユニット型施設における入居者の生活に関する先行研究

第4節 従来型施設とユニット型施設におけるケアの実践課題(本章まとめ)

第Ⅱ章 従来型施設とユニット型施設におけるケアの実践過程の検証

第1節 本章の目的と分析の視点

第2節 従来型施設とユニット型施設のケアの特徴

第3節 従来型施設とユニット型施設における介護職員の仕事への意識調査

第4節 ケアの実践過程における介護職員の実践課題(本章のまとめ)

第Ⅲ章 従来型施設とユニット型施設のケアが入居者の生活に及ぼす影響

第1節 本章の目的と分析視点

第2節 従来型施設とユニット型施設の入居者の生活行動調査

第3節 従来型施設とユニット型施設における入居者の生活意識調査

第4節 従来型施設とユニット型施設のケアが入居者の生活に及ぼす影響(本章のまとめ)

第Ⅳ章 従来型施設とユニット型施設におけるケアの両価性の統合

第1節 研究結果のまとめ

第2節 仮説の検証

第3節 従来型施設とユニット型施設におけるケアの改善

第4節 従来型施設とユニット型施設におけるケアの両価性の統合

終章

第1節 特別養護老人ホームにおける入居者中心の新たなケアの実践に向けて

第2節 今後の特別養護老人ホームのケアに向けた実践課題

第3節 本研究の意義と課題

【各章の概要】

序章 研究背景と目的・構成

序章では、特別養護老人ホームが抱えている今日的課題について、ユニットケアが登場してきた歴史的背景を記述した。また、現在の入居者の生活とケアの現状について整理し、研究目的と仮説、研究枠組みについて論述した。

厚生労働省は、2003年度に全室個室ユニット型施設を原則とした新型特別養護老人ホームを創設し、その普及に努めてきた。それから10年経過したが、ユニット型施設は24%に過ぎず、利用者負担や人材確保、用地確保の問題などが指摘されている。そのため、現在は広がりを見せていない状況にある。

特別養護老人ホームの入居者は、心身の状態・状況に応じて、専門職による日常生活支援を受けながら生活している。特に、入居者の生活構造は、居住環境を中心に直接援助を受ける介護職員のケアの実践構造による影響が大きい。そのため、人と環境との相互作用を基本としたソーシャルワーク的な視点からケアの実践課題を検討することが重要である。

特別養護老人ホームの「個室と多床室」が議論される中、本研究では、従来型施設とユニット型施設の施設構造を基にして、施設ケアを実践する上での特性を明らかにした。それを踏まえ、入居者の生活にどのような影響を及ぼすかについて検証し、今後求められる特別養護老人ホームにおけるケアの実践課題を明らかにすることを目的とした。

従来型施設とユニット型施設におけるケアの実践課題を、構造—過程—結果における3構成要素の枠組みから比較し検証した。構造は、従来型施設とユニット型施設の施設環境や組織の違いとした。過程は、ケアの特徴と介護職員の仕事への意識とした。最後に、結果として、入居者の生活行動と生活意識とし、以下の2つの仮説を立て実証した。

研究仮説①では、ユニット型施設におけるケア実践構造は、従来型施設より少人数単位のグループケアを提供しており、一人ひとりを把握したケアが可能である。そのため介護職員の仕事への意識・満足感・やりがい感は、従来型施設より高い。

研究仮説②では、ユニット型施設の入居者の生活構造は、個室であることからプライバシーが守られ生活環境が整っている。また、馴染みの職員からケアを受けている。そのため、従来型施設の入居者よりも、生活満足度や生活の質に関する意識が高い。

第 I 章 従来型施設とユニット型施設のケアの実践課題(先行研究)

第 I 章では、先行研究を基に従来型施設とユニット型施設のケアの実践に関する課題を構造—過程—結果の枠組みから整理した。

従来型施設は、構造的には 4 人部屋を中心に、ケアの管理統制が施設全体でされている。食事・排泄・入浴の 3 大介護が中心となり、集团的・画一的なケアが提供され、時間に追われ一人ひとりに合わせた柔軟な対応が困難であることが指摘されている。その結果、入居者の生活は、居室の滞在時間が長い。食事の時間以外はほぼベッド上で生活を送っており、単調な生活になっている。入居者同士やスタッフの交流が少なく、ADL や QOL のいずれにおいても入居者の生活全般で低いとされる。

一方、ユニット型施設は、構造的には個室環境が保証され、ユニット内の入居者のケアを中心にサービスが提供されている。少人数ケアにより馴染みの関係が築かれている。入居者一人ひとりの状態を理解し、柔軟な対応が可能である。しかし、他のユニット入居者やケア方法に関する情報が希薄であり、組織全体としてケアの統一性が図られていないことが指摘されている。入居者の生活は、個室によりプライバシーが守られ、リビングで過ごす時間が増え、入居者同士の交流が深まる。しかし、入居者の生活範囲はユニット内に限られるため、閉塞的であるとされる。

以上の先行研究における 2 つのタイプのメリット・デメリットを踏まえ、入居者と介護職員の関係性に着目して実証していくこととした。

第 II 章 従来型施設とユニット型施設におけるケアの実践過程の検証

第 II 章では、従来型施設とユニット型施設の両タイプにおける介護職員の視点から課題を明らかにし、研究仮説 1 を検証した。

1. 両タイプのケアの特徴—介護職員のケア行動調査—

従来型施設は 17 名（夜勤 5 名：早番 5 名：日勤 7 名）、ユニット型施設は 3 ユニットの 9 名（各勤務帯 1 名×3 ユニット）に依頼した。自計式によるタイムスタディ法を用いてケア行動を調査した。調査時間は、早番勤務者の勤務開始時間から同日の夜勤勤務者の翌朝終了時間までとした。分析は、介護職員の滞在場所や介護行為（食事・排泄・入浴・活動など）の時間量に関して両タイプを比較した。倫理的配慮として、関西福祉科学大学研究倫理委員規定により承認された。

その結果、両タイプのケアの方法や量に違いがある可能性が示唆された。1日のケア量は、従来型施設では、食事・排泄・入浴の3大介護が多かった。ケア方法は、役割分担遂行型ケアが実践されていた。効率的にケアを遂行することによって、歩行訓練などの個別ケアや健康体操などのグループ活動を行っていた。一方、ユニット型施設では、食事・排泄・環境整備のケア量が多かった。ケア方法は、ユニット内の入居者の日常生活をケアするため、連続的統合的ケアを提供していた。その結果、入居者と介護職員は、濃密な関係性を築くことができていた。

2. 両施設タイプにおける介護職員の仕事への肯定的な意識

特別養護老人ホーム11ヶ所の正規介護職員402名（有効データ数：従来型施設6施設181名、ユニット型施設5施設204名）に対し（回収率96%）、介護職員の仕事への意識調査を実施した。質問項目は、有能感20項目、満足感・やりがい感、職場内サポート16項目であり5件法を用いた。介護職員の有能感項目を主因子法プロマックス回転により因子分析した。その結果、第Ⅰ因子『仕事の創意・工夫と研鑽』、第Ⅱ因子『仕事の予測・問題解決』、第Ⅲ因子『仕事の達成・課題遂行』、第Ⅳ因子『仕事の全体理解・役割遂行』、第Ⅴ因子『チーム目標の達成・協力』の5因子で構成されていることが示された（ $\alpha=.744\sim.811$ 、全分散説明率66.016%）。更に、その介護職員の有能感下位尺度5因子、仕事の満足感及びやりがい感、職場内サポートの差について一要因分散分析を行った。その結果、従来型施設よりユニット施設が有意に高かった。従来型施設とユニット型施設のケアの特徴による差が生じたものと推察された。また、両タイプによる各要因への影響では、両タイプとも上司のサポートが仕事の満足感とやりがい感に対し有意な影響を及ぼしていた。上司の適切な助言や指導が、職員の自信や成長につながる。リーダーを育てサポートする組織・教育システムの重要性が示唆された。

第三章 従来型施設とユニット型施設のケアが入居者の生活に及ぼす影響

本章では、両タイプの施設構造とケアの実践過程が入居者の生活に及ぼす影響について明らかにし、研究仮説2を検証した。

1. 従来型施設と個室・ユニット型施設の入居者の生活行動調査

調査対象は、意思疎通は可能で、自分の意志で移動できる3名（男性1名、女性2名）の入居者とした。事前に施設の生活相談員並びに介護主任に相談し選定した。調査方法は、

他計式によるタイムスタディ法(5分間隔)を行い、1日のうち日中の活動量が多い時間帯の行動を観察した。分析方法は、両タイプの入居者の滞在場所、入居者間の会話・交流時間、生活行為(飲食・TV・身の回りなど)を比較した。その結果、従来型施設の入居者生活行動は、①居室滞在率は低かった。②移動距離や居室環境が生活面に影響していた。③喫茶やレクリエーション活動・歩行訓練などグループ活動や個別活動を行っていた。④入居者と職員の関係性は、職員と直接関わりの少ない時間が多かった。

一方、ユニット型施設の入居者生活行動は、①プライベート空間の保証により入居者の居室滞在率は高かった。②食事・活動以外の時間は居室で自由に過ごしていた。③居室と共用スペースとの反復性は高く、共用スペースで交流ができることによって入居者の生活リズムを整え、入居者の行動範囲を広げていた。④入居者と職員の関係性が築きやすく、会話量や活動量が多かった。

以上のことから、従来型施設とユニット型施設の施設構造やケア過程は、入居者の生活行動に影響することが示された。

2. 従来型施設とユニット型施設の入居者の生活意識調査

両施設タイプの入居者の生活意識・満足度を明らかにするために、従来型施設6ヶ所(72名)ユニット型施設4ヶ所(41名)の入居者を対象に個別面接法を用いた。対象者は、質問内容を理解でき、判断能力がある入居者とした。面接時間は20分~30分程度行った。あらかじめ、職員より調査の目的や方法について説明して了解を得て、面接前に再度了解を得て実施した。分析方法は、入居者の生活意識を主因子法プロマックス回転により因子分析した。その結果、第Ⅰ因子『生活支援』、第Ⅱ因子『生活意欲』、第Ⅲ因子『他者関係』、第Ⅳ因子『健康意識』の4因子構造であることが示された($\alpha=0.61\sim 0.77$,全分散説明率56.33%)。従来型施設は、活動意欲に関する第Ⅱ因子「生活意欲」が、ユニット型施設より有意に高い得点を示していた。この結果から仮説2は実証されなかった。

ユニット型施設は、ユニット内の生活で完結しがちである。従来型施設は、活動範囲を施設全体に広げて行動していることが推測された。また、第Ⅰ因子『生活支援』は、施設全体の生活満足感と生活の質に影響していた。介護職員と入居者との関係性を基にした日々の暮らしを支えるサービスの質が重要である。更に、第Ⅱ因子『生活意欲』は、施設全体の生活の質に影響していた。入居者の主体的な活動が、施設全体の生活の質に影響していることが推測された。

第IV章 従来型施設とユニット型施設におけるケアの両価性の統合

第IV章では、これまでの研究成果を総括したうえで、従来型施設とユニット型施設の両タイプの施設構造から生じるケアの実践課題を整理し、ケアの両価性を統合することについて論じた。

1. 従来型施設におけるケアの実践課題

従来型施設の構造は、役割分担遂行型ケアにより効率性が重視される。これは、標準的な統一されたケアであると言える。従来型施設はユニット型施設に比べ、職員の裁量権が低く柔軟な対応が難しい。入居者との関係性は浅く広いため、介護職員の仕事の有能感を低下させる。そのため、一人ひとりの入居者の心身の状態や状況に合わせたケアができるように、ケアの対象数や方法の検討が求められる。同時に、介護職員一人ひとりの経験値・能力・性格などを踏まえて、力を発揮できる組織運営を展開することが重要である。一方、入居者の生活意識調査から、従来型施設で多く実施されているサークル活動は、入居者にとって大きな楽しみであり、入居者同士の交流の場となっている。個々のニーズを踏まえたうえで、これまで構築してきた従来型施設の強みを生かしたケアを展開し、楽しみの時間を創り出すことが大切である。

2. ユニット型施設におけるケアの実践課題

ユニット型施設は、連続的包括的なケアを特徴としている。入居者の変化に気づきやすく、個々の状態に応じた個別ケアが可能である。しかし、介護職員が各ユニットに分散しており、ケア方法は介護職員の裁量に委ねられる。そのため、他のユニット入居者の情報が少なく、欠員が生じた場合や災害時等の状況によっては対応が困難である。入居者の生活意識では、生活環境が整い、自分のペースで生活できることを挙げられていた。

職員の勤務体制や仕事の方法を検討し、組織としての柔軟性を高めるとともに、入居者の生活範囲を拓げるケア方法の検討が求められる。

3. 従来型施設とユニット型施設におけるケアの両価性の統合

以上のことから、従来型施設とユニット型施設のケアの両価性を生かした実践が求められる。従来型施設においては、個室空間に近いプライベート空間を保証し、小規模ケアを推進する。担当入居者を明確にできる職員配置を行い、入居者と介護職員の関係性を深められる体制を検討する。入居者を包括的にケアすることによって、介護職員の自己啓発を促し、ケアの質が高められるものとする。

ユニット型施設は、入居者がユニット内の日常生活活動にとどまっている。入居者のニーズに基づき生活活動や生活関係性の拡がりを支援することによって、生活意欲を高められるものとする。ユニット型施設構造と機能を十分生かし、入居者の生活及び職員体制を工夫することが求められる。

終章

終章では、特別養護老人ホームの今後のケアに関して、多職種連携・協働を図り、地域住民の参加・協力のもと、入居者の尊厳や主体的な活動を支援することの重要性について示唆した。

本研究より、入居者の「日常生活支援」や「生活意欲」は、生活満足度や生活の質に影響を及ぼすことが明らかになった。入居者は、施設内の限られた空間で生活している。食事、排泄、清潔などの基本生活ニーズの充実のみならず、プライベート空間を保証し、入居者の自己決定を基に生活関係性を拡げることが重要である。そのためには、マクロレベルに視野を広げ、入居者の施設生活の先にある地域に目を向け、地域・家族を含めた参加・協働型組織運営を検討していく必要がある。

本研究では、従来型施設とユニット型施設のケアの特徴から、介護職員と入居者の関係性に着目し、意識・行動面から実証的な検討を行った。先行研究では、ユニット型施設への移行による介護職員の負担感や、介護職員及び入居者の行動調査、入居者満足度に関する研究など様々な実証研究がなされている。しかし、介護職員と入居者による意識・行動の両側面から関連させ実証的に明らかにした研究は見当たらない。そこで、本研究は、入居者の自己決定に基づく主体的な生活を拡げる実践の重要性を明らかにした。

本研究の限界として、自立度の高い入居者を対象としており、一般化することへの限界が挙げられる。また、介護現場の介護職員に肯定的な意識調査であったため、介護職員の全体の意識とは言い難い。今後は、要介護度が高い入居者や介護職員の負担感の調査を併せて実施し、特別養護老人ホームの組織・運営管理とケアのあり方について検討していきたい。

Practical Issues Relating to Care in Conventional Facilities and Unit-Style
Facilities of Special Nursing Homes for the Elderly : Effects of Facility Structure
and the Care Process on the Daily Life of Residents

NAOMI MIBU

Abstract

◆ **Purpose**

The purpose of this research was to investigate the nature of effects, due to the practice of care in conventional facilities and unit-style facilities of special nursing homes for the elderly, on the lives of residents actually living there, and to examine issues concerning the practice of care that will be needed in the future.

◆ **Method**

As the research method: 1) A general survey was carried out, from the perspective of care workers and residents, on practical issues in conventional facilities and unit-style facilities, based on laws and regulations for special nursing homes for the elderly and prior research; 2) For care workers, the features of care processes at both types of facility were elucidated based on a survey of care behavior, and an examination was carried out based on a survey of attitudes of care workers toward their work; 3) For residents, an investigation was conducted, based on routine living behavior of residents and a living attitude survey, regarding effects due to the facility structure and care process of each facility type.

◆ **Results**

With regard to the distinguishing features of conventional facility care, the results revealed that care of the "role allotment and execution" type is practiced, in which many residents are cared for by a small number of staff, and in terms of the sense of accomplishment at work, this approach results in lower satisfaction and sense of worth.

In unit-style facility care, on the other hand, continuous comprehensive care is practiced on a small scale, and the results showed that satisfaction and sense of worth are significantly higher.

In terms of the living behavior of residents, conventional facilities have a low rate of residents confining themselves to their own private spaces, and measures such as expanding the scope of life by providing opportunities for interaction with other people through activities resulted in a significant increase in "will to live."

In unit-style facilities, on the other hand, although individual living space is secured and there are close relations between care workers and residents, it was inferred that the scope of life is narrowed.

◆Discussion

For the above reasons, it was proposed that, in order to support the dignity of residents and their principal activities, it is effective to adopt a practice which incorporates the benefits of care in conventional facilities and unit-style facilities, and combines the value of both types. In the future, there will be a need to consider support based on the cooperation of local residents and multiple occupational categories, and the active participation and cooperation of facility residents, while keeping an eye on communities at the forefront of resident facility living.